

「ごん、草稿の特番だよ

愛知県半田市出身の児童文学作家、新美南吉（一九三二―四三年）の代表作「ごんぎつね」の草稿を、朗読を交えて紹介する特番「新美南吉ともつひとつの『ごんぎつね』」を東海ラジオが制作し、二十五日午後二時から放送する。

（服部聡子）

新美南吉ともつひとつの「ごんぎつね」

「ごんぎつね」は、子ギツネの「ごん」が、母を亡くして自分と同じ独りぼっちになった兵十ひょうじゅうにいたずらをしたことを後悔し、クリなどをこっそり届けるようになるが、火縄銃で撃たれる物語。五六年に小学四年の国語教科書に初めて掲載されて以来、六千万人超の子どもが学んできた。

南吉が十八歳の時に書き、児童文学誌「赤い鳥」に投稿した作品を、同誌を主宰する作家の鈴木三重吉が手を入れたとされる「赤い鳥版」が教科書の基になっている。その一方で、編集を経ない状態

朗読交えて紹介

25日 東海ラジオ



「ごんぎつね」の草稿を紹介する特番の収録に臨む志茂田景樹さんと遠山光嗣さん。愛知県半田市の新美南吉記念館で

の南吉自筆の草稿が、半田市の新美南吉記念館に残されていた。同局の秋田和典プロデューサーは、七月に「ごんぎつね」と企画した。

生誕百周年を迎える地元作家新美を取り上げようと取材する過程で、草稿の存在を初めて知った。「草稿版は赤い鳥版の方に比べ表現が荒々しいが、十代の南吉の気持ちがストリートに出ている。継母と折り合いがつかず、孤独の中で文学に向き合った姿を浮き彫りにしている。継母子どもの幅広い受け止め方を可能にする「ごんぎつね」の魅力について語る。

直木賞作家で最近絵本の読み聞かせで全国を駆け回る志茂田景樹さんや、新美南吉記念館の学芸員の遠山光嗣さんが出演。草稿版から赤い鳥版への変更点を指摘しながら、中でも注目したのは、結末の一文の違い。兵十に火縄銃で撃たれたながらも「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは」と声を掛けられたごんについて「ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました」とするのが赤い鳥版。これに対し草稿では「権狐は、ぐつたりなつたまま、うれしくなりました」となっている。

中学に入っすぐ、初めて「ごんぎつね」を読んだ志茂田さんは

心通わす喜び、率直に表現

今回の番組で初めて草稿の存在を知ったという。「命と引き換えにしても、兵十と心が通い合えた喜びを表現するごんの姿に、伝えようとおきらめないことが一番大事なんだと感じた。新美南吉を大きく見直すきっかけになった」と話す。「閉塞感の中で引きこもりがちな今の若い人たちの背中を押してくれる。違いをじっくり聴き比べてほしい」と呼び掛ける。

番組では、自分の存在を兵十に分かってもらえない、いら立ちの記述が「赤い鳥版」で削除されていたり、半田の方言の「鱒ますのだからやす」が標準語の「いわしのやすつりだア」に改められたりする点についても紹介。朗読で活躍しているサヤ佳さん（愛知県豊田市出身）が結末の部分などを読み上げ、二つのバージョンの味わいの違いを楽しむ。ナレーションは青山紀子アウンサー。